

# 日本陸軍と私たち

廣瀬 誠 陸自73

はじめに

一般に、国民の旧陸軍への評価は海軍に比し厳しいようである。その要因には、陸軍が海軍に比し政治的であつたと見られること、徴兵による兵の数が陸軍のほうが圧倒的に多くその世間への影響もそれだけ強かつたこと、大東亜戦争とそれに至る満洲事変、シナ事変等を陸軍が主導したとみられていること、海軍は海の上のことで国民にはわかりにくいこと等、種々考えられるであろう。

戦後生まれの世代にとつては、これらは全て「知識」として得られたことであり、戦前・戦中世代が肌身で経験し、あるいは直接に体験談を聞いたものとは、全く違うものである。自ら身を持って経験したことは強烈であり時にその口を重くさせる。一方で、直接に経験をしていないものにはその感覚を我がこととして思いやるのが難しい反面、少し距離をおいて全体を俯瞰することが

できる利点もある。そう考えると、戦後70年以上を経過して、直接戦争経験のない戦後生まれの世代が大半を占める今になつても、陸軍に対する評価が戦後大筋で変わらず、依然として厳しいもののように感じられ、その本格的な見直しが行われないうことには残念な思いとともに不思議な感じがしないでもない。

陸上自衛隊は、多くのものを帝国陸軍から受け継いでいるが、その歴史の経緯を、まずはそのまま受け入れる以外の態度を筆者はとることができない。これは、消極的、否定的な意味ではない。どの国の人もそうであるように、日本人は日本の歴史を愛情とともに引き受けるほかにないのである。歴史とはそのよう

なものであるかと思う。そのような認識の下で、陸軍に対する評価について少し考えてみたい。

## 1 考える範囲

まず、ここでは陸軍と陸軍軍人は分けて考えたい。組織としての陸軍の評価と個々の陸軍軍人の評価は別である。軍人は、組織の命令に従つて最善を尽くすのが本分であるの

は、古今東西共通である。そのような組織人として、陸軍軍人には、今の私達と同じように様々な方々がおられたのであり、現在の私たち日本人と比べても人格的に立派な方々が多かつたのではないかと率直に思う。ここで述べるのは、組織としての日本陸軍についてである。

次に、軍隊である以上、戦いに勝利することが究極の目的であり、戦いに敗れたことは事実であり、これについてのその評価が一般に厳しいことはやむを得ないであろう。ここで考えたいのは、陸軍が強引に日本を戦争に導いたのであり日本国民はその犠牲者であるという批判についてである。

## 2 批判への視点

(1) 軍が戦争を主導したとの見方について

明治維新以来、わが国は、西欧列強がアジアを植民地にする中でその独立のために富国強兵策をとり、日清・日露の戦役を経て、列強との不平等条約を解消し、第1次世界大戦により世界の五大国といわれるまでに急成長した。わが国が、引き続き世界の中で繁栄していくための方策

が模索される中で、関東大震災や大戦戦後不況、米騒動、労働争議、共産思想の台頭など国内の混乱に対処するために時の政権は苦慮する。

これらの問題を解決し得ないことに国民の不満は蓄積し、強いリーダーシップを発揮する陸軍に期待するようになる。満洲事変が起り、

シナ事変が勃発・拡大し、大東亜戦争へと繋がるのであるが、これらは国民やマスコミの支持なくしては成し得るはずはなかつたであろう。もし、国民が強く反対し、マスコミが鋭く批判し、議会が強い決意をもつて実質的に予算を付けなければ、明らかに不可能であつたと考えられる。

入り組んだ経緯を考えた上で、その責任を全て軍に帰するのは、いかにも無理がある。では、なぜ、そのような評価になるのであるか、その背景には、「敗軍の将、兵を語らず」との旧軍人の矜持、憲法前文の内容や占領期の施策の影響等が考えられると思うが、ここではこれ以上触れない。ただ、責任を全く軍に帰することで、私たち国民の当事者としての問題意識が薄くなつていなかたか危惧するのであり、民主主義

## (2) 海軍との比較について

海軍に比して、陸軍が主導して戦争に向かったという評価を耳にすることが多いように思うが、これも局面によって違うのではないか。

大東亜戦争における米國との戦いの可否について、米國との戦いは海上の戦いであり、その主体は海軍と考えられた。米國を敵として戦うことが不可能と考えるのであるならば、その主体である海軍がそれを明言しなかつたことの意味は重いであろう。

陸軍は、対ソ戦準備で大陸正面に責任を持ち、海軍は、対米戦準備で太平洋方面に責任を持つ体制になつていたはずである。そのような全般の戦略の立て方に問題があるとはいえるが、結果的に、陸軍は制度の枠組み上から見れば、全く準備してない太平洋の戦いに入つていくことになつたのであり、そこでの島嶼戦では主体にならざるを得なかつた。陸海軍の責任を論じたいのではない。筆者も日本海軍とその歴史に心からの敬意を表する一人である。ただ、歴史は多面的であり多くの経緯が絡み合つており、単純な見方はできないと言いたいのである。

## (3) 戦争に敗れたこと

やはり、この点に触れないわけにはいかないであろう。戦いに敗れたことは戦う組織として批判を免れることはできない。後を引き継ぐ日本人としては、真剣にその原因を究明し反省しなければならぬであろう。しかし、戦後、私たち日本人は「戦前」の反省をしばしば口にするが、全般的な漠然とした反省を口にするのみで済ませていないだろうか。本当に当時のことを知る努力をしたその上での反省であろうか。作戦・戦闘の戦史は、防衛庁戦史叢書として公的にまとめられているが、国家の全般にわたる戦争指導について、国家として戦後、公的にどのようなものがまとめられたのか寡聞にして知らない。また、それが存在しているとしても、それを広く国民と共有する努力をしてきたようには見えない。そのために、いわゆる東京裁判史観がいまだに大きな影響をもつたままになつていようにも思われる。

## 3 負けないための努力

さて、わが国が敗れた責任を考えると少なくとも同等の真摯さをもつて、将来考えられるわが国への

侵略に対して、現在までに不敗の態勢をどれ程整備しているのだろうか。と、私たちは考えるべきであろう。そのためにこそ、「反省」は求められるのだと思う。

自存自衛のための大東亜共栄圏や軍事政策などへの批判はしばしば見聞するが、では、翻つて、わが国の独立と平和のために「専守防衛」等現在の防衛政策は後世から不敗の態勢を整備していたと必ず評価されるという満腔の自信はあるだろうか。

わが国は、国家を防衛し国民の生命と財産を守るため、国家戦略、防衛戦略のほか、自衛隊のドクトリン、編成装備、教育訓練の一貫性、その実行の可能性、兵站体制、国民保護等、その質において大日本帝国と旧軍のそれを上回る不敗の態勢を整備していると胸をはって言えるだろうか。将来、その不備を指摘されて臍をかむことはないだろうか。このように現代に照らして考えることこそが本当に反省することなのではないだろうか。

## おわりに

拙稿は、戦後の旧軍に対する批判を全くいわれないものとして不当

視しようとしているわけでもなく、陸海軍の善玉悪玉論を展開する意図もない。そうではなく、批判するに当つては、反省の「形」ではなく、一つの長い歴史を持つ国家が、その生き残りを賭けた戦いとして明治維新以来大東亜戦争までを戦つた、その生き方について、この国に生れた者としてこれを丸ごと引き受ける以外なく、私たちの先人が走り抜けた道筋を私たちもひたすらたどつてみるという、世上に生きる普通の日本人が持つていよう自然な感情を大切にすべきだと思つただけである。

先人が刻んだこの国の歴史の時間の流れの中で私たちも生きていくという、理屈抜きの近しさの感覚があつて、はじめて我がこととしてその道筋が理解できるのではないかと思う。わが国の歴史も後知恵で全てを知つていよう立場から振り返るのではなく、過去からこちらに向かつて、定かならぬ未来を前に悩み、決断し、黙々として事に処した先人の目線でたどつてみて、はじめて、私たちはわが国の防衛に関して改善すべき面は改善し賞賛すべき面は受け継いでいくことが本当の意味でできるのではないだろうか。